



TITLE:

実感としての他者との「つながり」
(Abstract_要旨)

AUTHOR(S):

藤井, 真樹

CITATION:

藤井, 真樹. 実感としての他者との「つながり」. 京都大学, 2017, 博士
(人間・環境学)

ISSUE DATE:

2017-01-23

URL:

<https://doi.org/10.14989/doctor.k20094>

RIGHT:

学位規則第9条第2項により要約公開

(続紙 1)

京都大学	博士（人間・環境学）	氏名	藤井真樹
論文題目	実感としての他者との「つながり」		
(論文内容の要旨)			
<p>本論文は、他者と「つながる」ということがいかなることであるかについて、実父と闘病生活を共にした際の経験や、保育園の子どもたちとのかかわりのエピソードをもとにして論究したものである。</p> <p>まず序章では、父の病を知ったことで、それまで生きていた日常が大きく揺さぶられたという申請者自身の経験や、母が寝たきりの祖母に対して子守唄を歌ってやったというエピソードから、「私と他者」や「私と世界」とがいかにつながっているのかという問題意識が生じるに至った経緯が示される。</p> <p>これを踏まえて第1章では、この問題意識を学術的な文脈の中に位置づけ直している。申請者によれば、従来の心理学における他者理解研究は、「共感」や「間主観性」という概念を中心として行われてきたが、そこでの諸研究はいずれも本論文が明らかにしようとする「つながり」を直接的に解明するものとはなっていないという。例えば、従来の共感研究については、明確な輪郭を持つ何らかの感情の共有のみが扱われており、その枠組みでは明確な輪郭を持たないが確かに感じられる「つながり」は扱うことができない点、また、間主観性研究については自他の区分が暗黙のうちに前提とされている点などが批判される。これに対して本論文は、木村敏の理論を下敷きに自他未分の身体の次元に着目して、主体が紡いでいるノエシス的行為が世界や他者とどのような関係にあるかを見ていくことにより、「つながり」の実感がいかにして生まれるのかを解明していくのだという目的が提示される。</p> <p>続く第2章では、この目的のために必要となる方法論についての議論を展開している。そこでは、現象を既存の概念によって切り取ることで「分かったつもり」にならずに、この身をもってそのままに受け止め了解していくという現象学的な考え方や、観察者が客観的な立場から「観る」ばかりでなく、人と人との相互的な関係性の中に入り込み、そこで体験されるものを一人称的に記述していくという関与観察の方法、さらに一回性の事例の底に一般を見ていくという事例研究の考え方などが示され、それらを具体化したものとして鯨岡峻のエピソード記述法を採用することが表明される。</p> <p>第3章では事例検討を行っている。事例1と事例2は、申請者が保育園の土曜異年齢保育に5年間にわたって関与観察に出かけて収集した子どもたちのエピソード、事例3は申請者が突然の病に侵された実父の看病をする中で特に印象に残ったエピソードから成っている。</p> <p>事例1で取り上げられるSちゃんという女兒は、かかわりのなかで申請者に「柔らかな感じ」をもたらすような子であったという。申請者との別れを惜しむかのような「さようなら」の遊びや、Sちゃんの豊かな相貌的知覚にはっとさせられたというエピソードから、本論文はSちゃんとのあいだに感じられた「柔らかさ」とは、Sちゃんの世界との交わり方と申請者のそれとが響き合うことによってもたらされていたのではないかと分析する。その上で、そのように個々人の世界との交わりが響き合うことによってメタノエシス的な共通地平が開かれ、そこにつながるの実感が得られるのではないかとという見方を示し、このような事態を「メタノエシス的なつながり」という用語によって概念化している。</p> <p>一方、事例2のTちゃんは、対照的になかなかつながった感じの得られない「気になる子」、あるいは申請者との「間」に無機質な距離を感じさせる子であったという。本</p>			

論文は、その感触をTちゃんの世界や他者との交わり方の不安定さに由来するものと捉えて、そのような無機質な「間」がつながりの手応えをもたらす充溢した「あいだ」へと変容していくプロセスを追いかけている。そこにおいては、無理に相手とつながろうとして同じ行動をとったりせずとも、その場の雰囲気を感じつつ、そこに身を浸していくことが重要であること、そうすることによって各々の世界との交わり方が絡み合い、メタノエシス的つながりが生まれていくことが明らかにされている。

さらに、事例3では、父親と闘病生活を共にする中でつながりの実感を得られた場面や、逆に得られなかった場面について、ここまで導出してきた「メタノエシス的つながり」や「あいだ」といった概念を用いて分析をし、これらの概念の有効性と射程を確かめている。

最後の総合考察では、他者とつながる上で重要なのは相手を理解することでは必ずしもなく、その場の質感を感受することであること、それによってメタノエシス的な共通地平が開かれるとともに「あいだ」が息づいてきて、そこにこそ他者と「共にある」ことが可能になっていくのだということが確認される。そして、今後は多人数の人々同士のつながりのためにどんなことが必要になるのか、あるいは他者と物理的に場を共にしているわけではないときにもつながりの実感を得続けるために何が必要なのかといったことを究明していくという課題が挙げられている。

(論文審査の結果の要旨)

本論文は、他者との「つながり」の実感が何によって生じてくるのかを、突然の病に侵された実父と闘病生活を共にした際の経験や、保育園の子どもたちとかかわった際のエピソードを分析することで明らかにしようとしたものである。

従来の心理学研究においては、他者と調和的な関係を結ぶためにはまず何よりも他者を理解することが必要であるという暗黙の前提のもとに、「共感」や「間主観性」といった鍵概念によって二者関係が論じられてきた。だが、本論文によれば、それらの諸研究は、はじめから自他が切り分けられていることを前提として、その自他のあいだを「推論による飛躍」によって埋めるという発想に立っている点や、感情なり意図なりといった明確な輪郭を持つ表象が両者において一致するといった事態のみしか扱っていない点において、不十分なものである。他者となつながつているという実感は、むしろ自他未分の身体的次元においてそこはかとなく感じられるようなものであり、相手の持つ表象とこちらの持つ表象とが一致しない場合にも生じ得るというのである。言い換えれば、本論文が問題にしている「つながり」とは、他者の感情や意図を掴めるかといった他者理解の問題とは（無関係ではないものの）独立したものであり、まずもってこのような固有の問題領域を見出した点に、本論文の優れた着眼があると言える。

他者との「つながり」の実感が何に由来するのかという困難な問題に切り込むために、本論文が拠り所とするのは木村敏の理論である。木村は、意識には意識する作用（ノエシス）と意識される対象（ノエマ）の2側面があるというフッサールの考え方を拡張し、主体のあらゆる動的な作用をノエシス、その作用によって生み出されるものをノエマとみなして、人間の生がノエシス—ノエマの循環によって成り立っていると考えた。そして、個々人のノエシス的作用が絡み合うことで、より高次のメタノエシス的作用が生じ、各人がその一つのメタノエシスに導かれて活動しているときに、いわゆる「息の合った」状態や、他者との「あいだ」が手応えをもって実感される状態が現出するという独自の理論を打ち出した。本論文も、このような木村の用語法に倣って、その場にいる人々のノエシス的作用が絡まり合い、メタノエシス的な共通地平が開かれることで、「つながり」の実感が生じてくるのではないかという考え方を打ち出している。

具体的には、まず事例1において、子どもとつながるためには、世界との交わり方という動的側面において子どもと波長を合わせることが重要であるという指摘を行っている。常識的には、子どもとつながれるためには、子ども特有の世界の「内容」（ノエマ的なもの）を共有することが重要だという考え方が一般的だと思われるが、ここで本論文が指摘しているのは、内容物の一致というよりは、主体と世界とがどのように交わっているか、主体が世界に対してどのように身を挺しているかという動的な側面の方がより重要な鍵になるということである。また、子どもに対して全神経を研ぎ澄ませ、意識のベクトルをまっすぐ差し向けていくというよりは、むしろ子どもの世界との交わり方に触発され得るような柔軟な態勢をとることが重要であるということも示唆されている。

さらに、事例2において、つながった実感が得られにくかった子どもとのエピソードを取り上げ、無理に相手とつながろうとして同じ行動をとったりせずとも、その場の雰囲気を感じつつ、そこに身を浸していくことが重要であること、そうすることによって世界との交わり方が絡み合い、メタノエシス的なつながりが生まれていくことを明らかにしている。

これら諸々の指摘は、教育、福祉、医療等の実践者や、日常生活で人とのかかわり方を模索している人々にとって、「他者をよく理解せねばならない」「他者を注意深く観察せねばならない」といった固定観念を揺さぶるものであり、他者をつながるということがいかなることなのかについて大きな示唆を与えるものだと考えられる。

本論文は、人と人が一つの大きな生命を生きているといった木村敏の独特な理論を無批判に援用しており、それゆえフッサール以来の伝統的なノエマ、ノエシス概念を知る者の目からはやや慎重さに欠ける用語法が見られる点、他者をつながることが基本的に「善いこと」とされており、その負の側面が十分に検討されていない点などにおいて、まだまだ荒削りなものとなっている。また、他者とのつながり以前に主体と世界との交わり方に目を向けなければならないという指摘は興味深いものの、その「世界との交わり方」が何を指すのかがまだ曖昧なままであるといった問題点もある。さらに、事例3の父親の事例については、感動的ではあるものの、保育園の子もとのつながりと、病に侵され弱っていく実父とのつながりを同列に扱ってしまっている点が気にかかることも確かである。

ただし、本論文の一番の意義は、従来「他者理解」という枠組みでしか語られてこなかった対人関係について、それとは独立した次元で生起する「つながり」という観点から独自の光を当てた点、新しい問題領域を開いて、いくつかの示唆的な知見を導いた点にある。上記の諸問題は、申請者が今後さらに見識を深めつつ研究を遂行していく中で、より精緻な議論へと組み直されていくものと考えられる。

よって、本論文は博士（人間・環境学）の学位論文として価値あるものと認める。また、平成28年7月22日、論文内容とそれに関連した事項について試問を行った結果、当初「実感としての他者との『つながり』—『ノエシ斯的行為者としての身体』が絡み合う次元に着目して」となっていた論文題目について、「ノエシ斯的行為者」という用語を題目に含めるのは適切でないとの指摘が審査委員よりあり、題目を適切な形に改めさせた上で、合格と認めた。

なお、本論文は、京都大学学位規程第14条第2項に該当するものと判断し、公表に際しては、当該論文の全文に代えてその内容を要約したものとすることを認める。

要旨公表可能日： 年 月 日以降